

開かれた地域 —場所の新しい政治学に向けて—

アッシュ・アミン*
(森 正人**訳)

Regions unbound: towards a new politics of place
Ash Amin
Geografiska Annaler 86B-1 (2004) pp. 33-44.
©Copy right received from Blackwell Publisher.

キーワード: 関係性の政治学, 領域性, コスモポリタンな地域主義^{リージョナリズム}, 場所と空間

要約 この論文は場所の政治学の非領域的な読解を提案する。現代の地域主義の政治学に焦点を当てることで、グローバリゼーションと超国家的なフローとネットワークを持つ社会の登場がもはや空間的な境界劃定のプロセスや制度に基づく場所の政治学の概念化を認めはしないことを議論する。この論文の後半部では、所与の地域を横断する多様に距離化された地理とともに作用するもう一つの場所の政治学を概説する。

はじめに

都市や地域は、ローカルな経済システム、調整体制、ホーム、と呼ばれる場所という具合に領域的な実体として概念化され続ける。ドリーン・マッシーがこの号の論文で熟考しているように^{訳註}、ローカルなるものは依然として私的なもの、よく知られたもの、近くのもの、身体化されたものの空間と見なされ続けている。つまり、遠方の、抽象的で、仮想的で、侵入的で、覇権的なものと見なされるグローバルな空間とは本質的には別の空間としてである。その結果、ローカルなるもののイメージは、入れ子状のせめぎ合う領域の配置、領域をめぐる攻撃と防御、ス

カラー的差異、容れ物としての空間からなる世界として現れる。こうしたイメージによる理解が近年における二つの重要な変化によって挑戦を受けていることを考慮すれば、それは奇妙なことである。

第一の挑戦は、都市や地域を編成のグローバルなネットワークに浸され、また遠く離れた場所との結びつきやその影響に日常的に巻き込まれた場へと変化させていく構成的な力の登場である。これらはグローバリゼーションとわれわれが関わるなかで生じた変化であり、そこには観念、情報、知識、カネ、人間、文化的影響の日常的な超国家的なフローが含まれている。超国家的な企業、グローバルな金融機関、インタナショナルな統治、超国家的な文化のネ

* ダラム大学地理学部

** 三重大学人文学部

ネットワークといった、組織や影響のトランスローカルなネットワークの成長も含まれる。さらに市場の揺れ、環境破壊、グローバルな貿易の同意、力を持つ国家における政策決定といった遠くへ離れた場所での進展のさざめきも含まれるのである。

これまで、グローバリゼーションと結びついた空間的伸張や領域的なせん孔が見せる変化に富んだプロセスに光を当てる多くの研究が行われてきた。それは結局、識別可能な内側と外側からなる入れ子状の領域的編成の世界を、地理的領域、距離、影響、持続時間に基づいた異質な空間的配置の世界で置き換えてきたのだ。社会的かつ経済的かつ政治的かつ文化的な内側と外側が、空間的構成においてますますダイナミックかつ多様になりつつあるアクターのネットワークによる位相をとおして構成されるのだから、この生じつつある新しい秩序、空間的配置、空間的境界はもはや、必ずしも目的どおりの領域的なものでもスカラーでもない (Amin, 2002)。

その結果として生じる空間的構成の過剰はまことにちぐはぐである。それは世界中（そしてまたその下と上を走る）の電信と運輸のネットワークの放射を含み込む。それは、ある近接する隣所と結びつかないこともある (Graham, 2002)。それは、経線と緯線を横断し、あらゆる所与の地点からの結びつきを跡づけようとするあらゆる試みが、地図を横切る汚らしいなぶり書きと似てしまうような複雑さを持つ、信用のコミュニティ、夢の世界、文化の領域を含んでいる (Nederveen Pieterse, 2003)。それは、生産者と仲買人と消費者を、高度に構造化されたものや相互性と依存緊密なパターンともっとも予期しない場所で結びつける、供給プロセスや企業ネットワークを含んでいる (Dicken, 2003; Hughes and Reimer, 2004)。それは制度化されたコミュニティを新たな属性や愛着、怒りや恐怖の循環へと分解しては固定する、よく知られた、しかしいつも可視的なわけではない超国家的な逃亡、移住、ツーリズム、ビジネスの旅、難民、怒りの軌跡を含んでいる (Castles and Miller, 1998; Coleman and Crang, 2002; Gray, 2003)。それは神聖で、ウィロイド的で、デジタル的で、動物のような、植物的でもある生命による越境人間トランスヒューマン的なネットワークすべてを含む。それは小世界、身体的、空中、疫学的、惑星的、宇宙

的スケールでの意味や愛着を喚起し、またあらゆる所与の場において生命を徹底的に刺激する (Whatmore, 2002)。それは、自宅や家族や遊び場の機能から CD に記録された音楽やスクリーンの配置をもたらず長い文化的ネットワークに至るまで、地上の生命体と同様に多様な地理を持つ感情的愛着の空間を含む (ナイジェル・スリフトがこの号の中で明らかにしている)。それは今やコミュニティ、市庁舎、議会、国家や国民といった伝統的な場をはるかに超えて、仮想的な公的領域、国際的な組織、グローバルな社会運動、ディアスポラの政治学、惑星のあるいはコスモポリタンなプロジェクトへとこぼれだしている (Hardt and Negri, 2000; Connolly, 2002)。このリストはずっと続くのだが、要点は次のことだ。つまり、これらの空間性はローカルなるものの構成において重要なのだが、世界の覇権的な領域的想像力の外側で記述され続けているということである (Urry, 2002)。

都市や地域の地理をその複数的な空間的結びつきをとおして想像しようと、フローや結びつきや多様な地理的発現の存在論とともに行われる関係的な場所として読解する試みが今や存在していることを勘案すると、なぜこのような不十分さが依然としてあるのか不可解に思われる。これが、場所の領域的/世俗的な想像が身動きを取れないでいることはなぜ奇妙なのかについての第二の理由である。もっとも、都市や地域の領域的表象が息長く理解されてきたことを考慮すれば、おそらくそれはおかしなことではないのだろう。それは、イギリスの地図帳『A-Z』とかロンドンの同心円のイメージを、コヴェント・ガーデンと呼ばれる分配の中心に新鮮な食料を送り込む世界中のネットワークへと組み込む「関係的な」地図で置き換えることになろう。それは社会的、親族的結びつきが強固に残るポストコロニアルな国々の集落をめぐる近隣の境界を描き出し、われわれをして大地を横切る痕跡の放射としてのヒースロー空港やキングスクロス駅のような場所を見ることを可能にし、さらにロンドンがトランジットと結合性の場であることを暴き出しもする。言うておくが、私がここでロンドンを引き合いに出したのは、それが他の場所よりも関係的に構成されているからではなく、ただそれが最初に思い浮かんだからに過ぎない。

同じようなイメージは、それがもっともありそうにないと思われている場所、たとえば重要な貿易ルートで生活し、その宗教的実践が北アフリカや海を越えてニューヨークの雑貨屋まで伸びる、サハラ砂漠のベドウィン・キャンプからも思い浮かぶ (Stoller, 2002)。

地理学では、ドリーン・マッシーと彼女のオープン・ユニヴァーシティの同僚たちが、われわれはなぜ、居住、親近感、内在的、関係性、多様性、行為遂行性を意味するものとして空間をとらえねばならないかと哲学的に問いかけながら、場所や空間の関係的な意味に関する議論を作りあげてきた (see also Thrift, 1999)。それらは、われわれの都市の空間性に関する理解が深められるあらゆる種類の方法を想像してきた。この理論的探究のエッセンスは、この号のマッシーの導入論文に要約されている。都市や地域の結果として生じる可視化は興味深い読解を形作る。今やそれらはフローを寄せ集め、多様性を並置する結節点、あるいは関係的なネットワークの重なり—しかしかならずしもローカルの結びつけられない—の場所、時間と空間の中で遡る結びつきを持つ孔の空いた実体、そしてこの全ての結果としての常に変化する構成や性質や範囲の空間的編成として練り直される (Amin and Thrift, 2002)。こうしてみると、都市や地域はフロー、並置、多孔性、関係的な結合の空間性をとおして作られるので、領域的あるいは体系的な全体性の自律的な保証を付帯しない。ロンドンとかベドウィン・キャンプとか称される場所をとおして作用する物質的、仮想的、内在的關係性の多様な長さや持続を跡づける何かを作ることが分析的な問題として提示されるのであり、それは過去の空間的關係性の系譜と一致し、ロンドンやベドウィン・キャンプを少しずつ新しい力の発現の場へと動かすことになる。それゆえ、もしわれわれが空間的編成として都市とか地域とかをとらえるのなら、それらは常に動いている物質的かつ非物質的地理のかりそめの配置、動き続けているもののその印を残す事物の「没入」(Thrift(1999)の言い方では)、遠く離れたネットワークにおける状況づけられた契機、所与の場所を横断するネットワークによるそれに応じた産物として招集されねばなるまい。つまり、あらかじめ描かれたり排斥されたりしない

開かれた都市や地域として。

そうした想像力の闘いから何が生まれるのか。なぜ都市と地域が領域的あるいは関係的に解釈されるべきかどうかの問題なのか。ここで私が議論したいのは、非常に相異なる政治的なものの感性こそが上記の二つの場所の読解からはじけ出してくると私が信じているため、その違いは非常に深い意味で政治的な問題なのだということである (権力の意味が変化していることについては、John Allen のこの号の論文を見よ)。こうした差異はローカルな政治的活動の照準や範囲と関係するだけでなく、ローカルなレベルで政治的であると考えられるものとも関係する。それゆえ、ある意味で私の目論見は、ローカルな可動化として説明されるものの文脈において、政治的なものに対する開かれた理解を押し進めることにあり、それはナイジェル・スリフトがこの号で提示している政治的なものとしての情動という議論に共鳴する。私はこの二重の目的を地域主義の政治学に関する議論をとおして追っていく。地域主義は、地域的な政府や地域的な開発の主体行為が見せる大きな流れによって加速化され、このイギリスで確かに息づいている。そしてそれはまた、国家中心主義の悪魔たち、大きな国家、あるいは近代的普遍主義に対して生じる反応をとまなうもので、ヨーロッパのどこか別の場所での領域的政治学の主たる再配置の一部である。

領域性の政治学— 新しい地域主義

イギリス、ポーランド、ハンガリーにおけるガバナンス主導の法的移転の実験から、北部イタリアやかつての社会主義国のようなエスノ・ナショナリズム的な地域主義、あるいは「土着の」人たちの闘争や自治論を主張する運動の要求にいたるまで、多くのモデルが現在のヨーロッパでの地域主義にはある (Keating, 1998; Keating et al. 2003)。もちろん、ここで単一の政治をとまなう単独の地域主義があると前提すべきではない。しかし私は、リージョナリズムのきわめて相異なる規範的な登記を強調することで—熱病性のローカリズムから世俗的な共和主義や国際主義的リージョナリズムにいたる—、領域を

めぐる自立性は 1) ローカルな管理や民主主義を再構築し、2) 経済的見返りを増加し、3) 帰属の感覚を強化するだろうという前提に基づく多くの共通点があると主張したい。つまり私が言いたいのは、この三つの予想すべては場所の強固な領域的想像力と場所の政治学から噴き出しているものであり、それらは場所の關係的な読解から流れ出る予想とまったく一致しないということでもある。

一つの例として、イングランドを挙げてみよう。マッシーとスリフトと私は最近のイギリスの政治学における空間的文法に関する研究の中で、イングランドで主流を占めている地域の集会や開発のエージェンシーに関するプランでは、地元民に決定権を返還しようという主張がなされているのだが、そこでは古い地域的アイデンティティを再発見したり護ったりしようという強力なレトリックがあることを見出している (Amin, et al. 2003)。われわれは、こうした動きが非常に限定されたローカルな民主主義の意味とともに作用しており、また現代の経済の空間的な需要を見落としており (それらはますます空間的に分配される)、さらにまったく閉鎖的で排他的であり得る保守主義的な地域的アイデンティティにつけ込んでいると論じてきたのである。

もう一つの例として、たとえば、スコットランのナショナリストたちは、多文化主義や世界市民的な価値に基づいたスコットランドらしさという感覚を支持しながら、たとえその支配や経済的法的移転が似ていようと、文化的パローキアリズムに基づく場所の感覚をはっきりと拒絶してきた。ポーランドのアップー・シレシアにおける地域主義の可動化は国家の抑圧の歴史に対する文化的認識のための情熱的な口実なのだが、しかし同時に (他のポスト共産主義の文脈については Batt and Wolczuk, 2002) 地域的アイデンティティと地域経済を単一のヨーロッパへと節合するための手段でもある (Bialasiewicz, 2002)。北部イタリアの場合—おそらく今日のヨーロッパにおける地域主義の主張の中ではもっとも騒々しい—は大きな違いがあるわけではない。たしかに北部同盟の近年のレトリックは、たとえそれははっきりとしたゼノフォビアでないにしろ、とても排他的である。しかしここではまた、文化的、領域的差異が経済力の挫折として役立つもいる。その

支持者が何と言おうと、「パダニア」はその経済の地理 (ネットワーク化され高度にグローバル化されてもいる) によって構成されている一境界づけられてはいないし、不変のアイデンティティもないのだが (Agnew, 2000; Bialasiewicz, 2003 を見よ)。言い換えれば、少なくとも権力の空間的なダイナミクスが展開するところという意味では、パダニアのケースは、中道主義的なスペインの政体から独立した国民と国家のために歴史的に闘争してきたバスクとは大きく異なっている (Giner, 1998; Guibernau, 2000)。こうした重要な違いにもかかわらず、私は地域と地域政治を、領域をとおして考えようとする押さえがたい衝動がこれらの運動には常に残っていると信じている。新しい地域主義の大まかな形というのは、地域の創生とか地域の防護とかいうのが、ローカルな経済の繁栄や民主主義や文化的発現に対する回答なのだという確信を共有している。そこでこの論文の残りでは、私は新しい場所の政治学の二つの重要な側面と考えられるものに光を当てたい。

領域管理の政治学

新しい場所の政治学の第一の特徴は、ローカルなものへの回帰のために流行している中核的な統制主義として描き出されるし、またしばしば中心的な統治的管理から逃走しようとする欲望の基盤の上にある民主主義的改良として防御されるものである。近年見られる地域主義のほとんどは、地域の政府とか、地域の集合とか、地域の開発エージェンシーとかいうような中核的な制度においてローカル化した意志決定に関係している。そうした制度的枠組みは、ある群れが見せるダイナミクスやローカルな供給の鎖やローカルな知識の交流をめぐって集積される、地域的に統合された経済システムを作り上げるのに役立つと信じられている。この地域主義の政治学では、ローカル指向型の経済システムを支えるローカル的に統治されている制度的な構造に基づきながら、経済的なものと政治的なものとの間に強固な結びつきが築かれている (DETR, 1997; DTLR, 2001; OECD, 2001)。これは EU とか多くの国家政府によって積極的に支持されており、ヨーロッパ連合は加

盟を目指す候補国における地域主義や地域的な統治を促進しようと躍起になってきた—これについては、Batt and Wolczuk, 2002 を見よ。

ある水準では、管理のためのローカリズムの政治学が持つあらを探するのは困難である。地域の問題は資本や管理の集中であると批判地理学はながく論じては来なかったのではなかろうか。そもそも、内政権付与や地域指向型—中心的な国家、超国家的な企業、その他の脱中心的な権力に対する組織や力といった別の秩序の確立—は、地域的な不均等を是正する第一のステップとして必要なのだろうか。中心的な国家の解決法に依存してしまう文化を取り除くために、あまり好ましくもない地域とやらを支持することは、ローカルの能力形成とは言えないのではないか (Amin, 1999)。おそらく下方からの地域形成とか成長というオプションが、新しい経済的なローカリズムの前提は有効だと示すことができるのなら、そしてもし、かつてそうであったように、遠くから地域の運命を後押しし続ける権力の主要な秩序の縮減や抜本的な再設定をとまなうのであれば、それは可能となるのだろうが。

集団や開発エージェンシーなどとたえず結びつきながら行われている現代の内政権付与に見られる諸実験は、次の二つの条件に及んでいない。すなわち第一に、一経済のローカル化を主張する理論家がいるにもかかわらず—現在の企業や産業の文脈の主要部においては、供給の鎖、結びつきのアレンジ、知識のネットワークは局所的に制限を受けているわけではなく、空間的にまったく分散している (Amin, et al. 2003)。企業は今や、分散した供給の鎖に日常的に依存しているし、それらはローカルな市場からの脱出を誇りにしているし、それらの知識の基盤—潜在的にも公的にも—はますます距離化すると同時に技術によって媒介されているし (min and Cohendet, 2004)、それらのインフラ的な結びつき—兵站から訓練にいたる—は越境^{トランスリージョナル}地域的である。こうした観察により、集団のイニシアティブの潜在力とか約束されたローカルへの回帰といったものが疑われることになる。第二に、新しい地域主義は越境領域的な組織が見せる新しい空間において含意される力—物質的で仮想的で内在的な—を管理できるフリをすることができないことである。これらは、価格や金利

を共有するという形式を取りながら、基準やルール、企業や金融の投資の決定、金融振り込み、情報や人や知識のフロー、遠く離れた場所での決定の中で変化しており、常に動いており、ローカルな利益のために組織しようという努力を屈曲させたり破棄したりしている。最後にマッシーとスリフトと私がイギリス中心主義をめぐる近年の論争において論じたように (2003)、内政権付与やローカルな制度の形成は—集権的な国家から管理を奪い取るというレトリックにもかかわらず—、どこか別の所で公式化された法的なコード、評価指標、技術的基準のみならず、中心的な政府や強力な国家や国際的な組織などからの他者を定義する力に対しても、攻撃を行うことがない。

私の議論は、地域の声や代表を作りあげることには反対するのではない。そうではなく、ローカルなアクターたちが効果的な管理を行うことができるのか、社会的かつ政治的な空間として管理することができたりするとか、つまりあちら側には定義される地理的領域があるのだという前提に反対しているのである。日常的な越境領域的な組織やフローやローカルな権利擁護をとおして行われるビジネス—経済的、文化的、政治的—にとって通常の関係的に構成された近代世界においては、領域的な権力についてよりもむしろ、概してある人の利害に沿って調整されるネットワークや、結節的な権力を吟味することの方がもっと必要のように思われる (いくつかの強力な地域や国々が行っているような、抑圧や取り込みの手段の管理といった中核的な源泉にアクセスしないならばだが)。私はあとで「結節的な」地域の戦略という観念に戻ることとしよう。この懐疑論は公的なサービス、福祉、教区、環境規制、住宅供給といった領域—そこではローカルな管理がローカルな生活の質に決定的な影響力を持ちうる—における権利委譲とともに顕れる権力の重要性の軽視を意味しているわけではない。そうではなく、こうした権力が通常前提されるように「管理可能な」地理的空間を支配する能力へとつながることはないかと警告しようとしているのだ。つまり、管理すべき定義可能な地理的領域などないのである。

このことから、第二の問題に行き着く。それは新しい地域主義におけるローカルな民主主義の意味と

関わる。主権委譲に賛成する制度—政府系のもも非政府系のもも—の管理下では、そうしたプロジェクトは結局のところよい管理を行う政治学とかローカルな統制主義的文化の鼓吹とかへと墮落する。このことは、新しい声を引き込んだり、また市民的な制度をして意志決定や開かれた政府とか公的協議へ多く言及させたりすることになりうるだろう。すなわち、より内包的な方法で統治を行うことになる。このことは間違いない。しかしそれは、そうした作業を委託されたエリートの支配を十分に超えて権力とか説明責任を分配することが可能な広域的な権限付与の政治学には到達しない、限定的な民主主義である。民主主義の解釈が「地元民」への権力の返還を含むほどにまで広く定義されるなら（たとえば草の根の地域主義のキャンペーンによって）、選ばれた地域的な集合のための提案という形式で、代表制の民主主義の小さなバージョンや、責任を負うことができるエリートやその集合の中での別のグループの利害関係のまとめとして、改正のための多くの提案がなされることだろう—おそらくまじめに受け止められるだろうという希望のもとで—。ここでも別に誤りは無いのだが、提示されるのは、私が本稿の後半部で提示するような場所の別のそしてより拡大された政治学のための契機というよりは、民主主義の模倣的なモデルなのである。

領域的アイデンティティの政治学

発見されるべき、脅威をもたらす文化的「外部」から防護されるべきローカルな文化遺産は、しばしば地域の発展を支えるものと言及されてきた。文化の内部者は、地域主義的な政治的プロジェクトを維持しうる公的領域あるいは公的な文化として領域的に定義されるもの、とはっきりとイメージされている。多くのより糸は、地域的な民俗文化を描き出すだけでなく、植民地化や共通の外敵の物語から、英雄的行為とか抵抗の物語に至るまで、一貫した地域的コミュニティを語ることによって編み上げられている。こうしてイメージされる強固な地域文化によって、共通の利害関係、ローカルな方向付け、ローカルな生活様式に対する活潑な議論によって構成さ

れる強固な公的領域のさらなる強化が可能になるのである (Passi, 1996)。

私はこのように要約することで生じる、文化のカリカチュアや内部指向性の誇張がもたらす危険性を認識してはいるが、それでも主権委譲のポリティクスが親密性の空間、共有された歴史やアイデンティティ、利害関係や運命のコミュニティとしての地域というイメージに基礎づけられてしまっていることは依然として有効なままだ。これらは、内政権付与をとおしてもたらされるローカルな関心とかローカルな防衛の政治学とかに對する文化的根拠を刺激するようになってきている。地域的なアイデンティフィケーション、ローカルな公的領域の出現、地位的な自律性は、互いを強めながら手に手を取り進んでいくものと前提される。もちろん、この三つの現象の関係性はそれぞれの事例が持つ多様な形式を展開する。たとえば、「ケルト人」やバスク州による地域主義は地域的なアイデンティフィケーションと文化的統一性の強固な感覚に拠る (Le Coadic, 2002) 一方、「パダニア」(そして国民が弱体化されているという虚偽がますますうずまくロンドン) のようなほかの国民からの切り離しをもくろむ経済的に強力な地域の場合には、ローカルな文化的均質性への訴えかけは弱い。同様に、カタロニアやトスカナ州やスウェーデン南西部は、地域的な郷土よりも明確な公的領域のメリットを上手にはやし立てる。

領域的アイデンティフィケーションの政治学は、次のような問題含みの前提によって成り立つ。第一に、ここまで述べてきた線に沿った強固な地域的アイデンティフィケーションがヨーロッパのほとんどの地域において文化的実践を支配しており、またそれが地域主義の政治学へローカルな人びとを結集しているということが、自明視されえない前提。われわれは、カルチュラル・スタディーズの研究では現代のグローバリゼーションの重要な帰結が混成的でハイブリッドな文化や、ハイフンでつながれたディアスポラ的アイデンティティの興隆に関するもののはん濫しているのを知っている (Nederveen Pieterse, 2003)。エスニック、階級、ジェンダー、年齢的な集団化の文化的実践、さらに宗教的、文化的、地域的保護主義からエスノナショナリストや民族主義者に至るまで、モダニティやグローバリゼー

ションに怒りをぶちまける人びとたちでさえ、消費者、ライフスタイル、メディアの習性といった日常的な権力を介して浸透するものとグローバリズムを定義する（同じ号のリンダ・マクドウェルのイギリスの都市における不満を抱いた若い男性の文化的実践に関する論文も、こうした矛盾のいくつかをはっきりととらえている）。

顕著なことは、文化的なグローバリズムが、地域への愛着とか場所感覚が展開されたり明示されたりする日常的なフィルターになっていることだ（Passi, 2002 を見よ）。その結果として生じるのは、必ずしも場所感覚の弱体化ではなく、むしろそれは地域的な投錨や領域的に閉鎖された公的領域にもはや還元されえない、文化の複数性や地理的な近接性・遠隔性を折り畳む影響力からなるヘテロトピア的な場所感覚となる。それによりますます、与件としての都市や地域への文化的愛着は、複数の帰属意識をとおして定義され、そのためにそれは地域化されたアイデンティティの神話をめぐる政治学のための安易な約束など提供しないようになっていのである。これは場所の政治学の有効性を弱めたり、場所への愛着を否定したりしない。まったく反対に、それは粘着性のある領域的文化や領域的共通性の観念に基づく場所の政治学を問題にしている。ボスニアやセルビアやそのほかのよく似た例に見られるような、コロニアル的あるいはエスノナショナリズムの乱用の病理によって引き起こされる民族ナショナリズム的な地域主義の主張がはっきりと存在する一方で、別の場所ではその規範は、人が住む場所とか特定の地域的な生活様式への好みというような、場所への愛着とか、あるいは、ローカルな生活の質とかローカルな権威によってなされる決定をめぐってなされる闘争の形式といったものに基づく場所の政治学ともなるのである。

このことが私を第二の異論へとかりたてる。都市とか地域とかが、領域的に定義される公的領域を提供すると考えるのはあまりに単純すぎるということだ。大衆的なイメージはここでの美的な公的領域、あそこでの都市の創造性や混交の活気、どこか別の場所での活発な公的な協議とか討論、別の場所での国家の依存とか家族主義といった安易なラベリングで溢れかえってっている。社会資本に関するアカデ

ミックな記述は、たとえば市民の地域（多くの社会資本、多くの協議、多くの国家的透明性）として、あるいは官僚的（国家にとりつかれていたり、大衆参加の低調さとかによる脆弱な連合主義）、あるいは個人主義的（多くの市場、企業文化の増殖、弱い国家）として地域をラベル付けするために、一般的なローカルの公共文化とか公共領域とかに関する前提に基づく場所のカリカチュアにさらなる正当性を与えてきた。

これらのカリカチュアはローカルな公共領域の性質に関する真実味を帯びているのだが、描かれるその政治的帰結は突飛である。なぜなら、ローカルな公的領域とローカルな政治的文化の結びつきは、絶対的に間接的なものにしかかなりえないからだ。だから、第一に、純粹にローカリスト的な意味でローカルな公共領域をイメージすることは誤りである。公的領域一本、新聞、ビルボード、メディア、インターネットのような多くの「旅する」テクノロジーの助けを受けて、ここでもあそでも誰もが参加できる領域一は、その真の定義からして越境領域的である。それは可動的で循環的で偏在的な空間であり（Warner, 2002）、また多様な空間スケールと空間の形態で結びつきや言説的関与を生み出していく（超国家的な倫理的ネットワークやグローバルなニュースから、校庭やチャットルームに至るまで）。あらゆる特定の地理的場は、ローカルな公的領域に対して決して首尾一貫することのない多様なネットワークにおける結節的な結びつきにしかかなりえない。都市も地域も多くの愛着や政治的实践の地理を維持する、多くの公的領域における結節点である（Perulli, 1998 を見よ）。それらは、強固なローカルの公的領域を自動的に持つわけではない。明らかなことは、地域主義の政治学のための所与の場所はないということだ。そうしたあらゆる表出は、（ほかの政治的プロジェクトを支配する）ローカルな感情のコミュニティを形作るための周到なキャンペーンの結果でしかありえないのである。

場所の关系的な政治学

私は、都市と地域の关系的な読解がきわめて多様

な場所の政治学を提供すると言いたい。それは一空間的（ここではローカルのなものが単なる段階に還元される）でも領域的（ここでは地理的なローカリティが全てであるような）でもなく、位相的（ここではローカルのなものは異なるスケールの実践/空間的行為を結びつける—Agnew, 1994を見よ）なものである。私は、空間的近接性によって並置される異質性のある場、あるいは帰属や結びつきやフローを持つ多様な地理の場としてとらえられる、都市や地域の空間的存在論と調和する場所の政治学を探究したい。そして、それぞれを関係づけることが政治学の特殊な空間的登記であり、われわれが新しい地域主義において見出す政治的なるものに対してまったく新しく、そして拡張された意味を付け加えることなのだ」と主張したい（たとえしかるべきローカルな制度的配分—組み立てから、別の代表された利害にいたるまで—が再び立ち現れようとも）。われわれはこれら二つの場所の空間的登記の政治的挑戦を、近接性の政治学と結びつき（あるいは他動性）の政治学として実験的にめいめい要約することができる。私はこの警告を「実験的に」行っている。というのは、政治地理学は非一領域的な事項の中で政治学を総合的に扱うことができるのであり、あるいは同時に、社会的諸関係の空間性が持つ強い意味合いを維持している（マッシーがその論文で警告するような無邪気な目をしたローカリズムに、あるいは境界の政治学が取る別の形式にこの空間性を還元することなしに）制度化された述語を欠いているからだ。それゆえ次には、関係的な事項における場所の政治学の仮説的な枠組みが示されることになろう。それこそが、別の次元での政治学の創造を強く求める、もう一つの想像力のスケッチとなるはずである。

近接性の政治学

あらゆる場所の政治学が理解しておくべきグローバルゼーションのある重要な側面とは、ほとんどの都市や地域における日常的な交渉の多様性である。それは与えられた関係的な空間を共有する人たちの間の、文化的、社会的、経験的、願望的差異を照らし出すことと関係している。完全に首尾一貫したり

組み合わせざったりすることが決していない、ちょっとした配置や複数の文化から作られているローカルな社会の政治学は、親密さや共有された地域文化としては作られえないのである。

それでは何が代替されるのだろうか。一つの誘惑—それは、平凡で習慣的なもののアリーナとしてローカルを解釈するベンヤミン、ルフェーブル、オジェの読解において最近流行している—は、近接性の政治学を日常生活の政治学として想像することである。それに応じて、そうした政治学は労働や住居や学校や公共空間や公的サービスなどの住まわれた空間における日常的な差異の交渉によってもたらされた、難しい問題に取り組むことになるかもしれない。たとえば、多様性がいかに代表されるか、利害関係がいかに競合しているか、多様な需要はいかに衝突し調停されるか、ということが問題となろう。たとえ近接性の政治学として枠づけられなくとも、ローカルな政治学が持つこうした様式はつきることがない。都市計画や地域行政学や社会政策における議論は、日常的な公的商品がどのように配分されているのか、いかに相異なる声や利害関係が聞かれるのか、ローカルな差異がどのように調停されるのかという実質的な提案で充ち満ちている。こうした日常生活の読みは、あらゆる場所でのローカルな政治学の基盤なのだが、それは必ずしも場所の関係的な政治学に対する制限的な解釈ではない。ディアスポラコミュニティ、企業ネットワーク、消費パターン、旅行ネットワーク、コミュニケーションの小世界、空間を横断して広がる多くの公的領域の研究によって明らかにされているように、日常生活はますます距離をとともなう愛着や影響をとおして構成される。これらトランスローカルな住まうことの側面を、近接性の政治学として完全に描ききることなどできないのだが、地理的近接性として受け止められる日常生活の説明においてそれはむしろ過小評価される傾向にあり問題である。

私としては、近接性の関係的な政治学は、与えられた場において注目されているあらゆるものを秩序づけるのだと提案したい。それは、日常的なローカルとか親密さとかに制限されえない、それゆえにまた、インタナショナルあるいはナショナルな空間が別の種類の政治学のための空間として扱われる政治

学なのである（たとえば、調整、標準、「大きな」問題、国家的事象の政治学）。しかし、都市や地域のレベルで「政治的」なものとして扱われるあらゆるものと同じく、論理的な問題は、場所の政治学について種別的な何が残されているのかということである。そしてそれは、場所の政治学がナショナルなあるいはインタナショナルな次元での交渉のような空間の政治学や、あるいはグローバルな抵抗運動のような流動的な政治的配置の企みとは別の何かなのだという答えを誘惑している。しかし、そうした解釈は、別の空間的配置と結びつけられた潜在的に意味深い政治的效果を捨て去る危険性をおかしてしまう。空間は応答できるというのに。

もしあるひとつの空間的現象としての場所の政治学とは別の何かがあるあるとすれば（それは、ローカルなレベルでの政治的なものとして考慮されるもののなかに差異が存在する、というような主張の欲望と同じではない）、それは別の小世界が同じ近接した領分の上にそれ自身を見つけ出し、また別の方向に領分を引っ張ったり、あるいは、そこに別の領分が存在しないために別の利害関係がさかんに管理されたり交渉されたりする必要があるというものである。換言すると、それは、多様性ととも生きることや共通の領域的空間を共有することで生じる問題によって形作られる政治学なのである。もちろんこれらの両方の側面もまた、別の空間的アリーナに関わっている。たとえば、多国籍社会における所属や市民権に関する近年の議論では、国家は多様性に関する利害や共有された領域的コモンズの重要な中心点として説明されている。移民やアサイラム・シーカーに対する国家やナショナリストたちの攻撃の恐怖から理解できるように、国家的なるものは神聖な空間、そして帰属の場として激しくせめぎ合われている。しかし、ローカルな領域についておそらく特徴的なのは、それが生きられた空間として経験され、共通して、せめぎ合いの小世界として見なされていることであろう。すなわち、道路や騒音、公共空間、立地意志決定、近隣地区や隣人、住宅開発、路上生活などをめぐる闘争をとおしてつねに交渉される異質性として。

それゆえ、近接性の政治学は物理的空間、重なり合うコミュニティ、構築される文化的実践の間の地

理的並置がもたらす内在的な効果を調停するための政治学として読まれうる。そのようなものとして、近接性の政治学は自動的に良性と悪性ともみなされないし、所与の審議事項でも制度的な構成でも行為でもないし、さらにその空間的構造や配置のいかなる領域的制限も付帯しない。そのかわり、すべては論争的な関与の領野としてまさに空間的並置の形をとることになる。これは時間的でなく、常に交渉の、そして可変的な交差的ダイナミクスの産物であり、領分に関する、そして見知らぬ隣人に関する主張が作られるあらゆるところ、あるいは新しさが並置によって生み出されるところへと広がって行くような主張と、それに対する主張、合意や調停のアリーナとしてローカルな政治学の間をとらえることである。こうした解釈の含意のひとつが、近接性の政治学とは、いったい何と戦っているのか（空間的並置の領域、差異、促進）に拠るものだけということである。というのもそれは、（指定された制度の力と正反対に）ローカル社会を横断する発現と編成の行為の認識をとおして、論争的な関与を（統治性の政治学とは正反対の）念頭に置くことで、必ずやローカルな政治学の展開に関わるし、さらに誰が何を政治的と呼ぶのかということも問題になる。

こうして今やわれわれは、領域的な地域主義の特性となっている地域的な管理運営、あるいは地域的な運命の政治学とはまったく異なっており、場所の政治学を手にするようになった。それはあるヴィジョンや、論争的なアクターと競合し、しばしば対立させざる主張の間でなされる、開かれた、しかし実に権力的な関係の外側で制度化される一連の政治的な優先順位に寄与する。それは、どのような種類のローカルな領域が誰の利害関係の中で欲望されるのかということ（既得権益を持つ階級やコミュニティのマジョリティから、マイノリティや外部者や遠くのものまで）に関する相異なる考えを公的に活潑に議論することをとおして、地域の審議事項は異種の利害関係や所与の場所で重なり合う結びつきを持つ、別の世界の外側で築かれねばならないということをも認めることになる。「地域の創造」とは断片とともに、そしてそれとおして作用する場所の政治学の中で、完全に別物になる（Passi, 1996）。それは、活潑で複数的な地域の身体政治や複数の公的

領域による無制限の活動となるのである。それは、政治的な生命の不可視的登記を可視化する行為である（たとえば、市民組織やコミュニティに対する意志決定を脱中心化することによって。計画を多様に交渉されるものとして可視化することによって。感情、倫理、審美性、曖昧さ、不確かさを政治的と呼ばれる領域に持ち込むことによって）。先住性や特権化された原告を前提しないことで、それは差異や距離とともに働く場所の感覚や場所への愛着を発展させる行為となる。そして最後に、それは、われわれが地域的な生活様式と呼ぼうと決めた共有されたcommonsが、関係的かつ多様に構成されたものにすぎないことを受け容れる行為にもなるのである。

こうした規範的な透明さにしびれを切らし、この地域主義に対するもう一つの読解が良き生とは何かというヴィジョンを欠いているということに無責任なほどに不正確である、と異議が唱えられる。こうした批判者たちは疑いなく、何が誰のためになされるべきかという考えによって導かれる左翼とか右翼とかに基づいた活動家であると同時に、ある目的に専心する地域的な政策コミュニティを含んでいる。ここで私は、三つのポイントを記しておこう。第一に、このもう一つの読解は、進行しつつある政策決定と何の関わりもないし、明解な規範的な客観性も持ってない。私の議論は単に、これらは別の考えや思考性が議論され正統性を得て後の、活潑な議論の産物でなければならないというものだ。私の議論は、価値とか規範の前提されたヒエラルヒーに反対する。それは規範的な目的の拒否ではなく、論争的な関与に先立つ公式化の拒絶なのである。

第二に、そして結果的に、もう一つの規範性は（地域的な）民主主義を真剣に検討しようという欲望の産物である。私は、地域的なスケールでの権力の新しい中心を主たる推進力が確立するとき、領域的な地域主義の現代的な形が民主化の行為として通用することは難しいと考えている。民主化の活動としてみるならば、地域主義は市民権を拡張し、新しい声を持ち込み、力の不均等性に対処し、権威とか責任を脱中心化し、意志決定のプロセスを複数化しなければならない。結果的に、民主主義的な地域主義は、新しさ、論争、予測不可能な出来事、語られるべき異質性と差異を認めることによって生み出される過

剰さを受け容れなければならないのである。

第三に、こうして拡張された地域主義は、重要と考えられる枠組みの中に新しい優先順位を持ち込む。このことは、土着性、エスニシティ、場所感覚と結びついたものから、ある地域における異なった経済的利害の主張権にまで及ぶ、差異の並置によってもたらされた問題を含む。多民族的かつ多文化的社会において場所感覚や場所愛が変化していること、あるいはローカルな経済に集結するアクターの利害関係や実践—修理・修復や配分やロジスティックからインフォーマルセクター、公的サービス、小企業や法人部門に至るまで—が本当にローカルな相互依存性の集合へと集結されるのか、このことを今日の地域主義的マントラがほとんど語ってこなかったことは驚くべき事だ。フラクタルな文化あるいはフラクタルな経済としてのローカルなるものの意味は、大きく異なるローカルな政治学を産み出すのであり、それはローカルな文化とか経済の一貫性とかを前提しないのだ。

結びつきの政治学

ある地域の形成に関わる複数の公共圏は、空間的に伝播し地理的に可動的である。それは、この法律的状况をとおして機能すべき場所の政治学を呼び起こすのだが、新しい地域主義がそうしてきたように、前提された領域の内側と外側のある小さな国家的政治学や、想像された地域的アイデンティティを偽造することではない。ここまで論じてきたように、カネ、貿易、仕事、信用、信条、消費、情報、知識、権力を巻き込む組織/フローの空間的に伸張する循環に折り畳まれない社会生活の領域をイメージすることは難しい。同じように、領域的に所与としての公的領域の考えを維持し続けることも難しい。地域主義の制度や実践を構成するために選ばれるものが何であれ、そうした場所にまったく一致し得ない結びつきや意味や影響を免れることができない。

われわれが好む好まざるにかかわらず、都市あるいは地域における公的な生活や一般的なローカルな政治的領域を作りあげる関係的な結びつきや他動性の多様な地理とともに作用する必要性へ、場所の政

治学は向かっていく。分析的には、新しい地域主義はこの法的外部性を認識している。移民や旅や脱出、グローバルな文化的結びつき、外的経済統合とトランスローカルなビジネスの結びつきの出現、併合されたあるいは仮想的な世界、そしてグローバル化された近代の諸要素によってもたらされたローカルなるものの変容がもっとも最近では起こっている。ローカルな生活とはこうした影響の入り交じるものであるということは、地域主義者によって一般的に受け容れられている。しかし規範的には、この外部性は拒否されるか軽くあしらわれるかのどちらかだ。だからたとえば、自治論者や文化地域主義者は、ローカルな埋め込みやローカルな系統の強力な物語をとおしてそれを閉め出す傾向があるのであり、それによって純粋な想像されたローカルなコミュニティをでっち上げることができるのである。一方、プラグマティックな地域主義者や内政権付与主張者は、集団や連合した政府としての介入をとおしてローカルの行く末をコントロールするために、動員され組織化される地域の「内部」から存在論的に切り離されたものとして、そうした外部性をとらえる依然として傾向を持ってきた。

「われわれはあらゆる水準での相互作用をとおして空間を作る」(Massey, this volume, p.5-18)という考えに根付いている場所の政治学は、それとは全く別物である。それは所与の地域を飛び越える結びつきと推移性の多様な空間性によって作り出される必要があり、そうすると内部と外部はもはや場所的に定義されない。「ローカルな空間」とか、ローカルの特権とか考えられているものは、領域的に決定されえない。それは別の方法でなされる。その出発点として、関係的に構成された帰属と居住のコミュニティをとおしてせめぎ合われる地域の優先権が定義されるだろう。そうしてその結果は、特定の政治綱領あるいは良い生活に関する構想によって作られる地域の「内側」の出現である。まさにこのことは、ローカルなアクターと離れたところにいるアクターが所与の綱領に調印することに開かれており、それゆえ少なくみても、別の世界に居住する近接した他者を、共有された利害関係を持つ「ローカルなコミュニティ」に帰属するよう求める圧政から開放する中でこそ起こるはずである。

コスモポリタンな地域主義に関するマッシー、スリフトと私が著書(Amin, et al. 2003)の中で最初に議論したように、関係的な結びつきの空間をとおして行われるプログラムの政治学の強調から生まれる地域の政治学の実施には重要な変化がある。二つの例——一つは地域の経済的優先事項に関係し、もう一つは文化的優先事項に関係する——がその違いを描き出すのに役立つだろう。第一に、場所の关系的政治学では、ローカルな経済にとって何が良くて悪いかの決定が、スカラー的あるいは領域的前提から切り離されない。新しい地域主義では、「ローカルな」自治権が常に強化される一方で「外的」な管理は無能力化され、またローカルな集塊はローカルな収益を増大させる一方でグローバルな商品の結びつきは収益を消し去り、さらに、手作りの制度はローカルの方へと方向付けられる一方で遠く隔たった制度は略奪的あるいは無頓着であると考えられる。それとは別に、経済的価値をめぐる判断は、経済的繁栄や経済的幸福(たとえばネオリベラル対社会民主主義)のもう一つのモデルと、経済的に良い生活に関するせめぎ合う考えの公的な精査に基づいてなされるだろう。それは、地域を越えた空間的結びつきの中に組み込まれている利害関係にある考えがどれほど十分に適しているかに応じて、住民が反対したり賛成したりするものである。

それゆえ、経済的優先事項のローカルな議論で重要なのは一地域開発会社の中で、地域の集合体において、また公共領域において、どのような種類の地域経済が欲望されるかである。多様な見返りを約束する者は、経済的ローカリズムがそれ自体で地域の競争力やあらゆるものに対する見返りを約束するという偽りに依存するのではなく、地域の繁栄が抱えるせめぎ合う規範と結びついた流通の利益を透明化するよう期待されるであろう。ネオリベラルな経済、あるいは「容れ物」の政治学の必然性に関するフィクションがどのようなものであったとしても、あるいは世界の別の場所における経験に通じ一遍の配慮しかしないとしても、それは経済的繁栄と編成の複数の規範の働きを暴き出す。経済的実践には多くの規範がある。それらは、それ自身の空間的結びつき、特別なローカルの含意、ローカルな利益を最大化するためのいくつもの経済的解決法と政治的ア

クターを持っているのである。

多様なモデルとその結果が公になることで、ある選択が地域経済の特定の種類に関するものであると知っていることをもとにしてローカルな意志決定がなされるようになる。たとえば、貿易交渉委員会の力、移民労働者、ローカルのエリート、賃金抑制、最低限の規制に依拠した発展モデルと、社会的需要、フェアトレード、社会的投資、国際企業、投資信託会社に則った発展モデルとの間には明確な選択が存在し、それは同じような経済的アジェンダを追求しようとするほかの地域と結びついている。繁栄を享受していない多くの地域が直面する状況とそれほど違いのない最初のモデルは、報酬の良い局地的な利害関係によって後押しされる株主資本以前の発展モデルである。それは、コストを最小化し利益を最大化するローカルとグローバルの関係的な結びつきを利用し、(もし別のモデルが実行不可能な場合は)より良いローカルの収益のために非常に特殊な政策的調停を求める(たとえば、ローカルの需要の基盤を向上させたり、より熟練した労働者に魅力あるものとしたり、貿易交渉委員会への質的刺激を増加させたり)。第二のモデルは、株式資本のための成長というべきもので、相互性と社会的責務を原則とする。これは段階的な発展と還元された収入の差異を持つ経済、そしてローカルのにも世界的にも市民たちを結びつける社会的団結の文化を正当化するよう作用することを求める。この対照性は明らかに風刺的なのだが、重要なのは、「ローカルの収益」の分析がひとたび関係的に複数の枠組みの中に、そして特定の経済的発展の考え方の周りに位置づけられると、どれほど地域経済の優先事項に関する議論が異なってくるかということを強調することである(「土着」的なものに対して生じることを、先験的に特権的な与件とすることなし)。

同じように、文化的優先事項の領域では一第二の例となるが一、結びつきの政治学の枠組みにおける関心は、文化変容の現実的かつ物理的ダイナミクスに向かうことになる。というのは、起源とか土着性の存在論など前提されないからだ。しかしここでもまた、地域的なノスタルジアの情緒的な問題から開放された結びつきの政治学が、自動的に文化的差異やハイブリディティを認識する地域主義を生み出す、

という話に追従するわけではない。そうではなく、経済と同様に、肝要なのは文化的結びつきの他のモデル、地域にいる人びとが防御したいと考える文化的結びつきの種類、地域を越えた関係的な相互作用の価値をめぐる活潑な議論を用意することなのである。

分かりやすくするために、われわれは再び多文化主義をめぐる近年の議論でよく見られる、文化的結びつきに対するまったく異なる二つの考えを比較してみたい。一つはEUによるヨーロッパ文化都市プログラムに典型的な「消費者」コスモポリタニズムで、それは文化の玄関口として都市とか地域とかを称揚し、世界音楽、マイノリティのエスニック食や祝祭、多文化や多民族的の公共空間に基づいた再生、よそ者のエキソティシズムの価値に基づいて繰り広げられている。今日の都市再生や地域再生の多くの戦略は、世界における帰属というこの角度から、新しい消費をとおして再起動させる手段としてローカルな経済を用いる。文化的結びつきのもう一つは、グローバルな貧困、民族的不寛容、帝国へのローカルな応答の形式をとりながら、世界の多くの場所で増大する団結性や権利に関するコスモポリタンな精神である。それは追いやられた人びとやアサイラム・シーカーの権利を守り、文化間の対話をはぐくみ、遠く離れた人びとに関与している人種主義との闘いに基づいている。それはしばしば、「ホーム」と別の地域の両方で文化の政治学を形成して影響を与えるために、世界的な団結のネットワークや社会運動をとおして声や影響力を作りあげながら、ローカルの人びとを巻き込んでいく。二つの例での文化的結びつきは、追憶や文化的保護の場所としての地域という考えを拒否しており、また世界における同じ場所感覚を共有しないのである。

経済の例と同じように、重要なのは、結びつきの政治学はローカリズムとグローバリズムの間のバランスに関するものではないということだ。それは、文化的かつ地理的な帰属が見せる相異なる連携間での論争的関与を基盤とした、相異なる場所感覚や場所への帰属意識を明確にして、その相異なる場所感覚や場所への帰属意識の選択を問題化しているのである。それゆえ、地域は遠く離れた他者によっても主張されうるべきだし、本当の規範的な相補性とい

う基盤をもとにどこか別の場所での展開とも結びつくことができるべきなのである。

結論

この論文は、領域的支配権のしがらみから解放された、関係的に想像される地域主義を分節化することを目的としてきた。私は、もし場所がこの観点から問題とされるなら、多くの関係的な空間における差異の空間的並置と、結びつきの効果によってもたらされた文化的、経済的、政治的挑戦をとおして問題化されなければならないと示してきた。政治的配慮のために魔法のように作り出されるもの、重要だとか可能だとか思われるもの、政治のプロセスによって動員されるもの、人、場所について、こうした空間的効果がまさに肝心だと提示してきたのである。

ここで再び立ち帰っておきたい問題は、地域主義のもう一つの読解の中に、場所の政治学に特殊な何かが残っているのかどうかということである。本稿の議論の流れで言えば、都市や地域で進行しているのはあらゆるところで見出される政治的選択と民主主義の問題なのであり、それはいわば、都市や地域の政治学を家庭内とか国家とかインターネットの政治学と何ら変わるところのないものにしていく。領域的に定義され、空間的に制限された政治的配分や選択に役立つ、特定の種類のコミュニティとしてのフェティシズム的都市や地域から得られるものなどない。これは、都市や地域のレベルでの政治的なるものを損なわせたり、あるいは特定の任務に単にそれを限定したりする。今日の典型的な前提とは、国家政府が領土問題を取りくむ一方で、地域はローカルな問題に取り組むべきで、あるいは、国民が難民や移民や人種主義の問題を決定すべきである一方で、地域は「より小さな」あるいはローカルの文化的問題に取り組むべきだということである。

しかし、このことは空間的差異の重要性を陳腐化するのだから、ここで止めるわけにはいかない。私は、多様化する地理的範囲の多くの関係的ネットワークに組み込まれた、異質性のかたまりとしての別の空間性を、都市と地域が有しているのだと主張し

てきた。そのようなものとして、それらはおそらく社会-空間的編成(国民、世帯、組織、仮想的かつ想像されたコミュニティ)以上の、近接性と多数の空間的結びつきをもっとも鋭く言明している。それらは特別な「結節的な nodal」編成であり、そのようなものとしてそれらは特別な空間の政治学を見せている。それらは、差異が一つの場所にはっきりと集まり、無数のフローと結びつきのグローバル性が、ある場所で時間的に停止したときに生み出される問題に取り組むための重要な地平ととらえることができよう。相異なる経済的アクター、文化、市民と非市民、欲望と需要の配置は、空間的近接性の諸効果(怒り、不協和音、距離、可視性、遭遇、回避、モビリティ、不一致性)をとおして利害を本来的に奪い合うのである。言い換えると、グローバルなフローと結びつきは、文化の多様性の日常的な交渉、あるいは日常の領分をめぐって変化するローカルの人びとの間で繰り広げられる対立から、送金の経済に基づくローカルな経済的刷新が持つディアスポラのかつ超国家的な需要(所属)をとおしてなされるローカルなるものの再想像にいたるような、新たな配置のジレンマ、そしておそらく新しい政治的諸問題をつねに作りあげるのである。もし関係的に考えるのであれば、都市や地域はある種の民主主義的エネルギーの生成器となりうる。なぜならそれらは、利害関係を持ちながら差異や日常的なグローバルな結びつきとともに生きている市民というものをつねに想起させるからである。

追記

省略

訳注

このアミンの論文は、マッシーが編集を務めた特集「関係的な空間の政治的問題 The political challenge of relational space」の中に収められている。この特集には、マッシー自身 (Geographies of Responsibility) とアミンのほか、ジョン・アレン (The Whereabouts of Power)、リンダ・マクドウェル (Masculinity, Identity and

Labour Market Change), ナイジェル・スリフト (Intensities of Feeling : 「感情の強度」 として既訳) が寄稿している。マッシーは導入部で, 空間を関係的に読解することこそが「政治的なるもの」の新しい問題設定を可能にするとしている。

参考文献

- Agnew, J. (1994): The territorial trap: the geographical assumptions of international relations theory, *Review of International Political Economy*, 1: 53-80.
- (2000): The road to Padania: the Northern League and Italian regionalism, *International Journal of Urban and Regional Research*, 24: 227-231.
- Amin, A. (1999): An institutionalist perspective on regional development, *International Journal of Urban and Regional Research*, 2: 365-378.
- Amin, A. (2002): Spatialities of globalization, *Environment and Planning A*, 34(3): 385-99.
- Amin, A. and Cohendet, P. (2004): *Architecture of Knowledge: Firms, Capabilities, and Communities*. Oxford University Press, Oxford.
- Amin, A., Massey, D. and Thrift, N. (2003): *Decentering the Nation: A Radical Approach to Regional Inequality*. Catalyst, London.
- Amin, A. and Thrift, N. (2002): *Cities: Rethinking Urban Theory*. Polity Press, Cambridge.
- Batt, J. and Wolczuk, K. eds (2002): *Region, State and Identity in Central and Eastern Europe*. Frank Cass, London.
- Bialasiewicz, L. (2002): The re-birth of Upper Silesia, *Regional and Federal Studies*, 12(2): 111-132.
- Bialasiewicz, L. (2003): A society to match the scenery? New myths for new spaces in the Veneto citta diffusa, in ECKARDT, F. (ed.): *The European City in Transition*. Weimar, Bauhaus-Universität Weimar and the European Commission.
- Castles, S. and Miller, M. (1998): *The Age of Migration*, (2nd edn). Macmillan, Basingstoke.
- Coleman, S. and Crang, M. (eds) (2002): *Between Place and Performance*. Berghahn Books, London.
- Connolly, W. E. (2002): *Newpolitics: Thinking, Culture, Speed*. University of Minnesota Press. Minneapolis.
- DETR (1997): *Building Partnerships for Prosperity: Sustainable Growth, Competitiveness and Employment in the English Regions*. Cm3814, The Stationery Office, London.
- DTLR (2001): *Your Region, Your Choice: Revitalising the English regions*. Cm5511, The Stationery Office, London.
- Dicken, P. (2003): *Global Shift*, Sage, London.
- Giner, S. (1998): *Catalonia: The Tradition of Modernity*. University of Southampton, Southampton.
- Graham, S. (2002): *FlowCity: networked mobilities and the contemporary*
- Gray, J. (2003): *Al Qaeda and What it Means to be Modern*. Faber and Faber, London.
- Gubernau, M. (2000): Spain: Catalonia and the Basque country, *Parliamentary Affairs*, 53(1): 55-68.
- Hard, M. and Negri, A. (2000): *Empire*. Harvard University Press. Cambridge, MA. (ネグリ・ハート『帝国』)
- Hughes, A. and Reimer, S. (eds) (2004) *Geographies of Commodity Chains*, Pearson, London.
- Keating, M. (1998): *The New Regionalism in Western Europe*. Elgar, Cheltenham.
- Keating, M. Loughlin, J. and Deschouwer, K. (2003): *Culture, Institutions and Economic Development: A Study of Eight European Regions*. Elgar, Cheltenham.
- Le Coadic, R. (2002): *Bretagne, le Fruit défendu?* Presses Universitaire de Rennes, Rennes.
- Massey, D. (1999): *Power-geometries and the Politics of Space and Time*. Hettner Lecture 1998, Department of Geography, University of Heidelberg.
- Nederveen Pieterse, J. (2003): *Globalisation and Culture*, Rowman and Littlefield, New York.
- OECD (2001): *Cities and Regions in the New Learning Economy*. Paris.
- Passi, A. (1996): *Territories, Boundaries and Consciousness: The Changing Geographies of the Finnish-Russian Border*. John Wiley, London.
- Passi, A. (2002): Bounded spaces in the mobile world: deconstructing 'regional identity' *Tijdschrift voor Economische en Sociale Geografie*, 93 137-148.
- Perulli, P. (ed.) (1998): *New-regionalismo: L'economica archipelago*. Torino: Bollati Boringheieri.
- Stoller, P. (2002): *Money has no Smell*. Chicago University Press, Chicago, IL.
- Thrift, N. (1999): Steps to an ecology of place. In Massey, D. Allen, J. and Sarre, P. (eds): *Human Geography Today*. Polity Press, Cambridge.
- Urry, J. (2002): *Global Complexity*. Polity Press, Cambridge.
- Warner, M. (2002): Public and counterpublics, *Public Culture*, 14(1): 49-90.
- Whatmore, S. (2002): *Hybrid Geographies*. Sage, London.